

馬麟筆「層疊冰綃図」を中心とした南宋寧宗皇后・楊氏の「賜王提挙」題字作品について

孫燮陽（京都市立芸術大学）

南宋時代（1127～1279）には宮廷画家が輩出し、対角線構図などの特徴をもつ「院体画」が成立した。それらの作品は皇帝周辺の鑑賞に供されるとともに、皇帝・皇后の題字を伴い、臣下に下賜されることもあった。その中でも寧宗皇后・楊氏（1162～1233）は際立った存在である。現存する馬遠筆「十二水図」（北京・故宮博物院蔵、1212年）、同「華灯侍宴図」（台北・故宮博物院蔵）、同「清涼法眼・雲門大師像」（京都・天龍寺蔵）、馬麟筆「層疊冰綃図」（北京・故宮博物院蔵、1216年）などに、いずれも彼女の題賛が認められる。このうち本発表では「層疊冰綃図」を中心とする「賜王提挙」「賜王都提挙」の題字を伴う作例を手掛かりに、描写内容と題賛の関係を読み解き、「賜画」の背後にある政治思想と文化的意義を考察する。

「層疊冰綃図」に描かれる白梅は、花萼や枝が緑色を帯びた十弁の緑萼梅、即ち宮廷で栽培された「宮梅」である。楊皇后の題詩では梅の清寒な象徴性を通じて高潔な品格を体現し、作品を政治的且つ道徳的な自己表象の手段として機能させているが、馬麟はその詩意を的確に理解し、詩と画の呼応による「詩画一致」の画面を成立させている。

次に題字にみえる「王提挙」の人物像について考察する。先行研究では宦官・王徳謙と推定されていたが、嘉泰二年（1202）に新州へ流され、翌年には没しており

（『宋史』および『宋会要輯稿』）、本図の制作年代とは一致しない。本発表では、それに代わる該当者として文臣・王居安の可能性を提示する。王居安は楊皇后と政治的に近い立場にあり、権臣・韓侂胄（1152～1207）の排除に貢献したが、その後、史弥遠（1164～1223）の専権を諫めたために政界を追われた人物である。嘉定四年（1211）に祠禄官に属する名誉的な「宮觀提挙」に任ぜられたものの、嘉定十五年（1222）には再び政界に復帰を果たした。

同じく楊皇后が「王提挙」に与えた馬遠筆「松寿図」（遼寧省博物館蔵）、「竹鶴図」（台北・故宮博物院蔵）についても、描写内容と題賛との関係を考察すると、松下の高士や白鶴によって道教的な養生と隠棲の理想が示され、「王提挙」の長寿と安寧を願う意図が込められていたと考えられる。

つまり、「賜王提挙」題字をもつ一連の作品は、楊皇后がその近臣へこれまでの功績を賞するのみならず、良好な君臣関係を維持強化し、更なる政治的協力を期待する意図のもと、題賛と描写内容が緊密に結びつくよう宮廷画家によって制作されたのであり、南宋における政治的表象の一端と捉えることも可能である。以上、南宋宮廷絵画における表現描写と題賛の政治的意図の関係性を読み解くことで、皇帝周辺の題賛絵画の文化的意義についての新たな視点を提供したい。